

30代教師の転

起
んでも
きる！

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める！



「進学校の生徒だから」という思い込みを改め 得点力と読解力を育む指導を追究

山形県立酒田東高校

石山隆雄先生

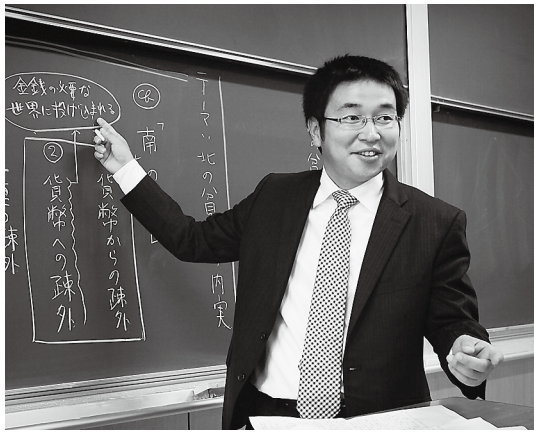
30歳

私が乗り越えてきたもの

「進学校の生徒だから大丈夫」

新卒で酒田東高校に着任して4年間、国語科の先輩の先生と共に学年を持ち上がりました。丁寧に順を追って文章を読み取り、提出物も徹底するなど、手厚い指導を心掛けていました。

5年目、1年生の担任になった時は、学年団に国語教師は私一人でした。プレッシャーよりも「こんな指導をしてみたい」という期待の方が大きく、これまで抱いていた「進学校の生徒だから、もっと自主性を伸ばす指導をしてみたい」という思いを投影しました。生徒が文章を読みこなせているという前提で、読解プロセスの細かな解説よ



いしやま・たかお ◎教職歴7年。同校に赴任して7年目。担当教科は国語。3学年担任。
山形県立酒田東高校 ◎全日制／普通科／共学。
10年度入試では、国公立大は、北海道大、東北大、山形大、筑波大、東京大などに139人が合格。私立大は明治大、立教大、早稲田大などに延べ209人が合格。

りも、文章全体の把握を目標にしたのです。演習プリントも作成し、最初は提出を義務付けていましたが、やがて任意としました。成績もある程度向上し、私は自分の指導の方向性が間違っていないと思っていました。

ところが、持ち上がりで担任していた2年生の秋、模試の成績が急落しました。特に現代文は、この時期から増える抽象的思考力を要する文章を全く読みこなせていなかったのです。

自主性尊重という名の無責任

必死で原因を考え、思い至ったのは、

思い込みから目の前の生徒が見えなかった

丁寧に文章を読む習慣付けが不十分だったということです。「進学校の生徒なのだから、解答はどうやって導くかを解説しなくても、理解できているだろう」という甘い考えがありました。

また、演習プリントを任意提出としたことも、成績降下の原因となっていました。「もう家庭学習の習慣は付いているはずだ」という思い込みから、生徒がどの程度プリントに取り組んでいるかをつかめていなかったのです。

私は生徒の自主性を尊重したつもりでしたが、実際には無責任な指導をしていました。「進学校の生徒はこういうものだ」という私のイメージに生徒を当てはめ、「生徒任せの指導」をしてしまっていたのです。

そして、これからも挑み続ける目標

教師の努力が生徒の意欲につながる

これまでの指導を根本から改めなければならぬ。そう痛感した私は、まず、「これは分かっているだろう」という先入観を捨てました。先輩の国語の先生の指導内容を思い出し、その重要性にも改めて気付きました。

授業では音読と発問に多くの時間を充てました。音読は文章のつながりを意識させるため、発問は文章について考えさせ、理解を深めるためです。答えが出ない場合も、私が答えを言うのではなく、なぜ答えが出ないのか、どこが分からないのかを考えさせていきます。「こんなことも分かっているのか、

か……」と、正直、驚くこともあり

した。生徒を「待つ」のは大変難しいことです。しかし、根気強く問い掛けるうちに、生徒は自ら答えを見つけてうとうとするようになりました。その上で、教師が文章構造や論理展開などを解説してこそ、生徒の読解力を育めるのだと気付きました。生徒任せにするのと、生徒を支援し手を掛けて「待つ」のでは、全く違うことを実感したのです。最近では、授業の復習プリントもこまめに提出するよう呼び掛けています。採点・添削では、ポイントを解説するだけでなく、「着実に弱点克服に向かっていくね」といったコメントを一人ひとりに書き添えるようにしました。

進学校であっても、教師が努力して手を掛けなければ、生徒も努力しなくなります。自分の指導と先輩の指導を比べて、そう学びました。

大学入試の先にある目標

持ち上がりで3年生を担任している10年度、授業改善の成果は、模試の成績が再び上がってきたことにも現れています。

国語教師として直近の目標は大学入試を突破する力を身に付けさせることです。私はその先を見ながら指導するよう心掛けています。国語という教科で養う読解力は、社会のあらゆる場面が必要であり、「生きる力」の一つだと言っても過言ではありません。だ

読解力は「問いを立てる力」。それを育む教師の努力

からこそ、授業を通じて多様な文章に触れる機会をつくり、生徒の本質的な読解力を高めたい。そして、本質的な読解力とは「問いを立てる力」だと最近思うようになりました。まだ手探りですが、文章から自分なりの問いを発見できるように思います。生徒は一人になりたいと思います。生徒は一人で文章を読めるようにはなりません。特に、現代文の読解の教授が難しく、「主観的な読み」をいかに「論理的な読み」にしていくか、指導の難しさを感じています。しかしその答えも、きっと実践の中から見えてくるはず。生徒に課題を与えつつ、自身も勉強しています。今後も学びを続け、理想の授業に一步でも近付きたいと思っています。

石山先生 の 授業実践



Q&A

Q 生徒の読解力を育むために、板書をどのように工夫していますか？

A 現代文は、評論・論説文と小説とで板書の仕方を変えます。

評論・論説文では、論理展開の重要な部分はあえて空欄にし、そこに入る内容を論理の筋道から導けるよう、生徒に考えさせる時間を設けています。

小説では、板書は人物関係の整理など最小限にとどめ、4人1組のグループ学習を行います。夏目漱石の『こころ』で「Kの部屋にぼんやりと明かりがついていたのはなぜか」など、生徒に自由に問いを立てさせ、グループ内で討論することで、行間を読む力の育成を期待しています。

Q 文章を読みこなすために授業でどのような工夫をしていますか？

A 課題文を扱う最初の授業で、全員に全文を音読させます。その後も折に触れて、ペアや個々のペースで音読をさせ、文章のつながりやリズムをつかませます。以前は、「高校生に音読は必要なのではないか」と思っていました。声に出して読むことで、生徒はより深く文章を読み込めるようになってきました。

「読んでおきなさい」と教科書を読むことを宿題にするのでは、生徒には効果が見えず、読んできません。文章の読解力を付けるためには、単純な指導の積み重ねが大切であると実感しています。

メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す石山隆雄先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスを自由にお寄せください。編集部より、石山先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスにメッセージを送信ください

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp